

(論文内容の要旨)

本論文の研究は、自然災害との関わりで常に多くの問題を抱えるアジアの国と地域を背景に、コミュニティ主体の防災マネジメント（以下、Community Based Disaster Management = CBDMと呼ぶ）について考究したものである。特に、1) 現在の外部支援型CBDMの取り組みを進め、復元力を持つコミュニティ形成の有効性を高め、2) コミュニティに本来備わる能力を活かした災害対処力を育てる方法の探求、3) 住民の能力開発を、コミュニティ主導の減災と対応の取り組みで行う、モデル手法の提案を目的にする。論文は6章からなり、第1章では、研究の方法論として、文献調査、著者のフィールド実践による経験の蓄積、学んだ教訓の進行中のプロジェクトで試行実験、からなる組立が表示される。

第2章では、近年のCBDMの取り組み方法についての文献調査が行われ、知見が示されている。今日、CBDMの主要な目的は良く理解され、多様な地政的環境の中で採り入れられている。トップダウン方式の減災だけでは、脆弱なコミュニティの地域に特化した要望には応えられず、屢々、地域の持つ能力や資源を無視してしまうことも理解されている。しかし、現在のコミュニティを主体にさせた防災マネジメントでは、住民がそれを持続できるようには配慮されておらず、コミュニティ内部にある対処能力を無視する傾向や、コミュニティに外部から問題を持ち込んでしまう傾向が強い。最も重要なことは、現在の取り組みの多くに持続性が無いのは、それらの多くが外部組織の寄付で動いているからである。同時に、これまで、コミュニティの持つ知識や対処能力に対する理解や記録が十分ではなく、それらを統合させて、“受け入れ可能”で、CBDMの原理に概ね従ったものとして提供できなかったことにもある。

第3章は、インドの6つの地域で、著者が中心となって実施したCBDMの経験から学んだ知識の報告である。6事例のうちの2つは、2001年のグジラート地震と2004年のインド洋津波に襲われたアンダマン・ニコバル諸島での、被災後の問題が扱われている。活動内容を調べて学んだ重要な教訓として、都市では、移住民の脆い生計手段や社会構造を脅かす日々の小さな危険が、洪水や地震といった大規模で強烈な危険よりも、大きなストレスを創り出しており、農村では、コミュニティの持つ強い社会構造や伝統的なシステムが、大災害でも彼らの復元力として貢献していること、また都市と農村での対照的な背景の相違として、都市住民には、原因と結果を結びつける意識に欠け、農村コミュニティでは、幾世代もの自然環境と自然なバランスの維持に役だってきた、彼ら自身の強い伝統的な知識体系を、忘れがちであることが報告されている。

第4章では、著者がこれまでの活動経験で学んだことの幾つかを、インドのタミル・ナドゥ、オリッサ、ラジャスタンの3カ所で継続中のプロジェクトで試験的に実施し、有効な検証結果が報告されており、コミュニティの持つ伝統的な知識とそれを強化させることの重要性、及びそこに不可欠な外部支援組織の役割を指摘している。

第5章では、現行の取り組み方と、著者が経験から学んだ事実との比較が行われる。現行の取り組み方は、地球的な問題に焦点を当て、それでコミュニティの脆弱性も定

(論文内容の要旨 つづき)

義するが、人々にとっての現実の脆弱性は、時間をかけて積み重ねられたストレスである。現行の取り組み方法は、普遍的な性質の科学的な解決策を提供し、屢々それは、外部支援として人々に押しつけられる。著者が学んだコミュニティの伝統的な知識も同様に科学であるが、それが文書化されておらず、教育課程に組み入れられなかったために、忘れ去れてしまう傾向がある。現行の取り組み方はコミュニティを無理やり参加させるが、危険の存在は彼ら自らが知ってこそのものであり、どのようなコミュニティ主導のプロセスであれ、それが原点である。現行の取り組み方は、備えに焦点をあてるが、著者が学んだCBDMは、生活様式を変え、予防の文化を促進するものである。

第6章は結論であり、各章で得られた知見が要約して示されている。

以上

(論文審査の結果の要旨)

本論文では、著者の多年に及ぶCBDMの実践経験の蓄積から学んだ教訓と、主要な調査研究から得た重要な知見が以下の 10 項目で示されている。

1. コミュニティには、自然に適合することで発達させてきた、本来的に備わっている復元力がある。
2. その復元力は、日々の活動において試され、復元力を強める慣習や慣行は、時として、彼らの文化的、精神的な文脈の中で理解される。
3. 突発的で壊滅的な災害を受け入れるコミュニティの能力は、小さな規模で繰り返して起こる災害に対しての復元力に依存する。
4. コミュニティが、自然環境の中に徐々に蓄積されているストレスを正しく把握せず、対応していない場合には、コミュニティの脆弱性は増加する。
5. 被災後の外部からの介入が、小さな災害は吸収してしまう傾向があることを理解せず、それを強めてしまう場合には、新たなレベルの脆弱性を生み出す。
6. それとは逆に、被災後の外部からの介入が、既にある対処方法を強化しようとする場合には、復元力は増進される。
7. コミュニティの持つ対処方法を調べ、復元力を高める方策を見つけ出そうとする介入や、関連する研究活動は、いまだ不十分である。
8. 対処能力は、外部からの介入とは一緒にはなれない。むしろコミュニティには、外部から問題が持ち込まれるのである。
9. 自然とコミュニティとの伝統的な繋がりを取り戻させる教育が必要である。これは、コミュニティの持つ伝統的な対処方法の知識を再考し、それを現在のシナリオに適合させる方法を見つけることを意味する。
10. 脆弱性を持つコミュニティの復元力モデルには、教育とコミュニティの知識を知ること、そしてなによりまず実践することが必要とされる。コミュニティ主体の防災マネジメントを持続させるには、小さなショックは受け入れて、ストレスが高まるのを防ぎ、復元力を培うことが重要であるとの結論である。

以上、本論文は、持続的な、コミュニティ主体の防災マネジメントの鍵は、コミュニティが持っている、地域の文化と環境に根ざした伝統的な対処方法を評価し、それを強くして復元力を高めることにあり、外部支援組織の役割は、コミュニティが、まわりの自然環境を理解し、自然に適合できる力を強めることと、自然の理解や自然への適合を阻むあらゆる障害を取り除くための、技術的な解決策を見つけ出せる環境をつくることにある、との役割を明示することによって、地球環境学の発展に大きく貢献した。よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成 20 年 8 月 1 日に、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

以上